

養老孟司論

和田 勉

一

養老孟司の百冊を超える著作の中では、専門の解剖学をはじめ、脳や身体についても独自の考えが示されている。理系と文系、脳と身体、人工と自然、都市と農村などのような二項対立するものとそれらの両義的な側面に注目することによって、現代の諸現象の本質を的確に捉えている。これらの養老の言説の中から、遺伝子に関わるところを中心に分析したい。また遺伝子だけでなく脳や身体にも焦点を当てることで、養老の人間観や死生観についても言及したい。それは養老の表現行為そのものの一面を説明することにもなるはずである。このような理系の知見を踏まえた著述について論ずることも、要はそのテクストを分析・検証しながら整合性と一貫性をもって解説する作

業であることに違いはあるまい。本稿を、同時代をリードする知的言説を捉える文化的研究の範疇に属するものと解して頂きたい。

浅井清他編『新研究資料現代日本文学 第三巻 評論・論説・随想Ⅰ』（平12、明治書院）の中で、百瀬久は養老について、「ヒトの脳の中から、みずからのからだを含めた自然の實在感が失われつつある現代に、江戸時代以降の武道の流れの中に日本人が忘れていた身体を再発見しようとするなど、モノとヒトとを見つめながら、独創的な思考を展開する。専攻分野の研究を深める一方で、言語表現に関心を持つ」っているところに特質を認めている。確かに、解剖学の知見を踏まえて、近年は幅広い文明批評も行っている。そこでは、脳や身体などについての考察をもとに独自の見解が示されている。なお、養老は『脳という劇場 唯脳論・対話篇』（平3、青土社）の中村桂子との対談の中で、解剖学と分子生物学の「両方に僕は足をかけ」ており、両者を「つなごうというのは軽業みたいなことにな」と述べている。

ところで、『唯脳論』（平1、青土社）の中で、「人文科学や社会科学の人たちは、脳と言えば自然科学の領域だと思っている。自然科学も何も、そう思っている考え自体が、自分の脳の所産ではないか。こうした諸科学から言語を抜いたら、何もできなくなるであろう。（中略）要するに、あらゆる科学は脳の法則性

の支配下にある。それなら、脳はすべての科学の前提ではないか」と記している。『考えるヒト』（平8、筑摩書房）の中でも、「文学はどうか。じつは文学もまた、脳の科学である。（中略）感情や情緒は、典型的な脳のはたらきです。『主観』もまた、脳のはたらき。それでなけりゃ、なんのはたらきだというのだ。じゃあ、社会科学は。これらも脳の科学である。社会は脳が作るからである」と記している。

このように養老は、脳の研究が人文科学などの領域と密接につながっていることを指摘している。養老は日経サイエンス編『養老孟司 アタマとココロの正体』（平15、日本経済新聞社）の中の津田一郎との対談において、「脳研究が進むと、人文社会科学が変わってくるだろう」とまで述べている。自然科学や人文科学など学問が細分化されて、分野の境界が人為的に為されている状況の中で、あえてその境界を越えようとしている。確かに生を表象するテキストに、もはや文系と理系というような境界は必要ないと言えよう。

二

養老の著作の中から、遺伝子に関わることを具体的に挙げながら分析したい。まず「個体発生と系統発生」（柴谷篤弘・長野敬・養老孟司編『講座進化④ 形態学からみた進化』平3、

東京大学出版会）の中で、養老は「動物は二種類の異なる情報系をもっている。ひとつは遺伝子の情報体系であり、これは直接には発生過程、さらにはその遺伝的なゆらぎである進化過程として表現される。もうひとつは、神経系である。（中略）神経系は、進化の結果生じたものであり、われわれの思考は、その神経系の機能である。それが進化を考えるとすることは、明らかに『自己言及』なのである」と記している。「神経系の機能」とは養老が説く脳の情報系と言い換えることもできる。遺伝子の情報系と神経の情報系は、ヒトの脳の中で重なっていて、区別がつきにくいところがある。更に、文学との関連で言えば、脳を調べることで心がどれほど分かるかという厄介な問題も派生してくる。因みに『臨床哲学』（平9、哲学書房）の中で、「心とは『はたらき』すなわち『機能』である。その場合、脳とは、『つくり』すなわち『構造』である。その区別をしているのは、つまるところ我々の脳である。機能と構造を区別するのが脳のもつ癖なのである」と記している。

『人間科学』（平14、筑摩書房）の中では、「古典的な心身問題の中心は、脳という物質のかたまりから、なぜ心という不思議なものが発生するか、という問いだった。興味深いことに、それに情報という視点からある意味で回答を与えてしまったのは、遺伝子＝DNAという、遺伝子という情報の正体だったのである。（中略）DNAの分子構造の決定と、それに引き続く遺伝

情報の翻訳機構の解明は、DNAが「物質である」と同時に、『情報としてはたらく』という奇妙な現象がどういうことであるか、それを解明してしまつたのである。脳はたしかに物質であるが、同時に情報器官としてはたらく。つまり脳も、DNAと同じように、物質と情報という二面性を含んでいる。それからDNAと同じじゃないかという点に、少なくともある類比が存在することは認められるであろう」と記している。確かに、脳自体はただの物質であるが、脳は情報活動を担っている。同様に、DNA自体を取り出せばただの粉という物質であるが、細胞の中では情報として働き生命活動に関わっている。

遺伝子と脳という二つの情報系について、『毒にも薬にもなる話』（平9、中央公論社）の中では、「社会は脳が作るが、その脳は遺伝子が作る。したがって、生物学的に言えば、歴史の理論的分析は、この二つの情報系に還元する。たとえばいわゆる治世とは、基本的には脳という情報系優位の社会であり、乱世とは、遺伝子という情報系優位の世界」と述べている。歴史を生物学的に独自に捉えているのであり、中世のような乱世と近世のような治世を対比的に捉えている。ただし、遺伝子の法則を「強いものが勝つ」というように極めて割り切った捉え方をしている。

養老は『脳+心+遺伝子VSサムシンググレート』（平12、徳間書店）の中で、「人間の遺伝子进行操作していくということ

は、いったいどういうことか——。それは遺伝子という情報系を、実は脳という情報系で置き換えていく、ということになります。本来遺伝子がやってきたことを、脳がアレンジしてやる。（中略）ところが進化の過程を考えますと、脳を作ってきたのは遺伝子です。遺伝子が脳を作ってきたということは、遺伝子にできないことがあって、都合のいいことに脳を使おうと思つて遺伝子は脳を作ってきたはずですが、しかし、今度は、この脳が完全に遺伝子进行操作するということが、もし現在の遺伝子工学の目的であるならば、それは遺伝子系を神経系が完全に凌駕する、ということを目指しているものであります。遺伝子の研究をしている人は、自分は遺伝子中心主義だどこかで漠然と思つているかもしれませんが、実はヒューマンゲノムプロジェクトというのは、脳中心主義」と述べている。同様の見解は、『人間科学』や『あなたの脳にはクセがある——「都市主義」の限界』（平16、中央公論新社）の中でも記されている。

このようにヒューマンゲノムプロジェクトというのが、細胞—遺伝子という情報系を、脳—言葉という別の情報系に移し変える作業であるということ強調している。ヒューマンゲノムプロジェクトを推進している人達が、遺伝子が中心であるように思つているが、実は脳が中心であることの自覚が欠如していることを指摘している。遺伝子という情報系を脳という情報系に翻訳する作業において、脳そのものの役割を重視してい

るのである。また、「現代の社会的システムは、ヒトの脳が生み出した。それが自然、つまり遺伝子の生存にとって適切か否か、そこが問題になっている」(『あなたの脳にはクセがある——「都市主義」の限界』) ことに言及している。人間について考える場合、遺伝子と脳の二項対立があり、どちらに重点を置いて捉えるかによって違いがあるし、そこまで掘り下げて捉えるべきだと説いている。それは単に自然科学の分野のみならず、人間について考察する種々の分野に適用できるといっているのである。ただし、「脳が遺伝子の代わりをしようとしても、たぶんうまくいかない^準」と述べている。

『ヒトの見方』(昭60、筑摩書房)の中で、「遺伝子に関するヒトとチンパンジーの違いは、通常の生物で同属の異種が示す差に達せず、亜種よりは大きい、という程度にすぎないという。もし、両者のあいだで異なる遺伝子を数えあげたとしても、わずかの差であるから、これはいずれ可能となるはずである。(中略) 共通性に注目するかぎりヒトとチンパンジーの差異はごく瑣末なこととなるが、事実上は哺乳類の遺伝子の機能に関して、重要な発見をもたらす可能性をもつ」と記している。チンパンジーと対比することで、ヒトに特徴的な遺伝子を明らかにすれば、発生や進化の問題の解明につながるだろうと予測している。なお、日経サイエンス編集部編『養老孟司・学問の格闘——「人間」をめぐる14人の俊英との論戦』(平11、日本経

済新聞社)の安藤寿康との対談の中で、養老は「哺乳類のクロインがどんどんつくられるようになれば、遺伝子が形質をどれぐらい決めていくかということも調べられるようになる」と述べている。

『バカの壁』(平15、新潮社)の中では、「脳の進化にはほんのわずかの遺伝子しか関っていないことは間違いない。その遺伝子はいずれ抽出されるでしょう。すると、今度はそれをいじって、猿の脳をもう少し増やしてやったらどうなるのか、さらには人間の脳を今の三倍にしたらどうなるのか、という興味が自然に湧いて来る。ある種の『超人』を作ったらどうなるのか。これは非常に興味深いテーマです。このときにできた新しい人間は、今の我々と同様に考え、感じられるのももちろん、それにプラスαがついている可能性が十分ある。乱暴に言えば、そういう人間ができた時には、現代人のある種の役割は終わりになるのかもしれない」と記している。このような時代を迎えれば、当然人のありようは変わるはずである。おそらくこれまでに培われてきた個人や人権の概念と、それを土台に築かれた社会規範や文化や生活習慣は意味をなさなくなるだろう。

『脳が語る科学——養老孟司対談集』(平11、青土社)の中川志郎との対談の中で、養老は、「人間が生き残るための最終的な可能性は何かといえば、遺伝子操作だと思います。未来の人間が人間を設計して、どんな状況にもストレスを感じずに済

む、自然とは切り離された人間を人工的につくる。(中略)脳が遺伝子をコントロールするかどうかという問題になる。そうなれば子供は予定されたものとして、現代社会にピタッと合った設計図通りに生まれるようになる」と述べている。この後、「最終的につくり出したものがモンスタースタナのか、神なのか」と述べている。遺伝子操作によって「人間を人工的につくり」、「どんな状況にもストレスを感じない」ようにしてしまう。知能や老化さえも調節し、現在の人間などおよそ貧弱に見えるほど、人類を徹底的に操作して変化させることも考えられないことではないというのである。^{注2}

『涼しい脳味噌』（平3、文芸春秋）の中では、「遺伝子操作は危険だと言うが、車も危険なら、核戦争だってもっと危険ではないか。それに、後二者は現実の危険だが、遺伝子導入の危険は、まだ仮想上の危険に過ぎない。仮想上の危険はより大きな危険で、現実の危険はより小さな危険だと思ふのは、単に人間の想像力を重く見た結果に過ぎない。それだって、遺伝子導入の結果、脳が変わってしまったら、変わるかもしれないのである」と記している。遺伝子操作によって環境に適応した人間を作ることとは、時代の要請であるとして肯定せざるを得ないと捉えていることが分かる。現時点で安全に見える遺伝子操作が破壊的な影響をもたらすこともありうるだろうが、未来に向かって持つ意味は極めて複雑で予知しがたいためか、具体的な言及が為

されているわけではない。「名前のついていない恐ろしい菌、正体不明の恐怖が、我々の意志に反して、元に戻したり止めたりする方法を考えつかないうちに世界に放出されてしまうかもしれない^{注3}」という不安が払拭されたわけではない。

『続・涼しい脳味噌』（平7、文芸春秋）の中でも、「人間の遺伝子の変更」ということで外国に遅れをとれば、「外国で遺伝子導入の結果できた超人は、なぜか人種差別主義者だったので、生みの親である白人は助けたが、すべての日本人を、無益不要だとして抹殺したと伝えられている」と記している。これは、遺伝子操作に反対する世論への皮肉を込めた寓話である。^{注4}

このように養老は「脳が遺伝子をコントロールする」時代を予見しており、そういった未来について強い関心を持っている。遺伝子操作の技術は常に人間の手で厳しく管理されるべきであるが、誤解によって遺伝子導入の進展が妨げられることは避けなければならないと考えていることが分かる。養老の説く内容そのものの当否はともかく、専門分野の知識を踏まえて、デザイン・チャイルドなど未来社会への予見がなされている。科学技術の発展によって社会の転換期を迎えている現在では、遺伝子操作による人間の人工化が為される可能性がある。ヒトが同じヒトを改良できるような技術によって、人間育種さえもあり得る。遺伝子工学・遺伝子治療によって、設計図の段階から人間の手を加える時代を見こしている。それは、「ハイテク化の

行き着く先は、明瞭である。ハイテク自体の進歩が、生物学的ヒトの能力を、もはや許容しなくなるときが、かならず来る。そのときまでに、人間を変えればよい。それが遺伝子工学の目標であろう。そこではヒトは、現実には『神を創る』のである」（『カミとヒトの解剖学』平4、法蔵館）という言葉に顕著に示されている。

三

『あなたの脳にはクセがある——「都市主義」の限界』の中で、「仏教が人の煩惱、欲望を去れと教えるのは、基本的には都市批判、脳化批判なのである」と述べている。また、日下公人との共著『バカの壁をぶち壊せ！——正しい頭の使い方』（平15、ビジネス社）の中で、養老は「宗教にもいろいろなものがあります。『欲を去れ』と説いているのは仏教だけです。（中略）『食欲』や『性欲』は、満たされればとりあえず消えてしまふ類の欲で、『金欲』や『権力欲』は、満たされてもなくならない欲です。後者の二つの欲は人間の脳が大きくなってから発生した、遺伝子的にも抑制力が付いていない新しいタイプの欲です。すなわち、いくらでもやる。それゆえに権力というのは無限に拡大する性質を持っている」と述べている。このような前者の欲は、ドーキンスの『利己的な遺伝子』の考え方を適用すれば、

遺伝子が自らを残すために「食欲」や「性欲」をもたせているということであろう。また後者の欲は、多様であるだけに文学の素材ともなり易い。

ところで、文学を含む芸術の表現は、一般に自己固有のものと考えられている。例えば、夏目漱石が「芸術は自己の表現に始まって、自己の表現に終るものである」（『文展と芸術』）と述べていることに顕著に示されている。ただし自己固有のものと思っているものの中にも、構造主義が明らかにしたように社会的な状況によって左右されていることもあるし、一方では目には見えない遺伝子のプログラムによって動かされている「食欲」や「性欲」などもあることは否定できない。更には、「金欲」や「権力欲」など「人間の脳が大きくなってから発生した、遺伝子的にも抑制力が付いていない新しいタイプの欲」も共通のものとして含まれているはずである。

『脳という劇場 唯脳論・対話篇』の中村雄二郎との対談の中で、養老は「人間の遺伝子を全部読もうと。そして、遺伝子の百科全書みたいなのをつくって、今度はそれらの遺伝子のどれが、発生の過程で身体のどこに絡んでくるのかということだが、ある程度分かってくるのではないかとということなんです。それで初めて、脳がこれまで大きくなってきた過程が、少しは解けてくるかなと思っている」と述べている。脳についての解明が進めば、夢や幻想など近代的知によって不合理なものとし

て周縁に追いやられた無意識の領域が明らかにされ、ひいては文学を科学的に解明することにもつながるだろう。

養老の文学についての考えは、『身体の文学史』（平9、新潮社）に主に表出されており、その他に『脳が読む——本の解剖学1』（平6、法蔵館）『本が虫——本の解剖学2』（平6、法蔵館）『臨床読書日記』（平13、文芸春秋）などにも窺える。『脳が読む』や『本が虫』や『臨床読書日記』は書評の形をとっており、養老の好む書物やその内容を知ることとはできても、文学についての養老の体系化された思想を知る上では必ずしも適切ではないので、ここでは『身体の文学史』について触れておく^{注6}。

『身体の文学史』は、従来の文学史的方法に対する二重の本質的な疑義から発している。第一に、表題に顕著に示されているように、近代的自我に焦点を当てたのではなく、文学における身体に注目している。身体に焦点を当てた作品について論じているだけでなく、漱石の『こころ』などを挙げながら、「近代日本の『個』の問題の淵源には、普遍的身体の抑圧喪失がある」と説いている。第二に、従来の文学史という方法論に内在する概念的な分類に捉われていない。むしろ、従来のあり方に問題提起する姿勢が見られる。例えば、白樺派も形式としては私小説であり、自然主義と同じであるから、白樺派という命名自体が妥当なのかと述べている。内容の違いが、当然形式に現れるはずだということを前提に展開している。

『身体の文学史』で採り上げられた深沢七郎の『檀山節考』について付言すれば、『檀山節考』には近代の人権感覚に基づく考えではなく、遺伝子の論理が展開されている。つまり、遺伝子は血縁者を助けるために、自分自身を犠牲にするのも厭わないということである。食糧に困れば、種の保存のために姥捨てもやむを得ないと認めてしまうのである。森岡正博との共著『対論 脳と生命』（平7、ジャストシステム）の中で、養老は『檀山節考』について、「あれは一種の自然の評価であって、山のかにばあさんを置いてきて何が悪い、というとおかしいんだけど、本来人間はそういうものだという、ある種の積極的な意思がそこにあっただと思う」と述べているのも、これを裏づけている。人間の自然のままの姿をありのままに表出したというのである。

なお、谷崎潤一郎の『刺青』『痴人の愛』『春琴抄』や大江健三郎の『死者の奢り』『奇妙な仕事』は身体そのものが扱われているのであるから、日本近代文学における身体性の問題という『身体の文学史』の論旨からすれば、詳しく言及すべきであった^{注7}だろう。谷崎のこれらの作品では、女の美しい肉体の魅惑によって、男は美への拝跪を余儀なくされてしまう。まさに肉感的な題材が、加虐・被虐というところまで大胆に採りあげられている。『春琴抄』では、春琴の火傷の後、佐助が針によって自らの眼を突き盲目となっている。盲目になったことで、男女の

交情から肉体の美しさが、かえってよく分かるようになったとある。また大江のこれらの作品では、閉ざされた状況の中で生きる閉塞感が、実存的な身体感覚として表出されている。『死者の奢り』では水槽の中の死者達の方がむしろ確固たる存在として、その不動性を誇示している。『奇妙な仕事』では、殺される犬の恐怖と直結した姿に、現代人の不安な実存が身体を通して表出されている。

次に、ドーキンスに関わる養老の言説について見ていきたい。『あなたの脳にはクセがある——「都市主義」の限界』の中で、ドーキンスの『利己的な遺伝子』の欠点に言及して、「細胞も連続していて、滅びたことがない。細胞という『生きたシステム』およびそれが利用する情報としての遺伝子、両者は滅びたことがないのである。ただしこの両者は、まったく違う性質のものである。遺伝子はDNAつまり化学物質だが、細胞はたいへんな数の分子からなるシステムである。私はシステムということばは、もともと細胞のような性質をもつものを指すと考えている」と述べている。ドーキンスの説が、「情報としての遺伝子」と「細胞という『生きたシステム』」を区別しておらず、遺伝子という情報が滅びずに残ってきたことの方だけを強調しているところが問題であると指摘している。分子で言えばDNAが生き延びるのであり、細胞で言えば生殖細胞が生き延びるのであり、両者の複合したシステムが生き続けていると捉えて

いる。同様の見解は、『解剖学教室へようこそ』（平5、筑摩書房）や『いちばん大事なこと——養老教授の環境論』（平15、集英社）にも記されている。^註

蓮実重彦との対談『蓮実養老 縦横無尽』（平14、哲学書房）の中で、養老は「人間を動かしているのは、直接的には脳に決まっているんで、間接的に動かしているのが遺伝子ですね。それをいきなり遺伝子を持ってきますから、いくらなんでも話が早すぎるよ、乱暴だよって言うんです。ドーキンスの利己的遺伝子なんて典型的にそうですね、長い目で見りゃ、遺伝子の都合で動いているのは確かですが、人間の行動を左右しているのは、脳以外の何ものでもない」と述べている。遺伝子よりも脳を重視すべきであると明確に主張している。更に甲野善紀との共著『自分の頭と身体で考える』（平11、PHP研究所）の中で、養老は「遺伝子があるの考えるわけがないので、それに『セルフイシュ（利己的）』という表現を付けること自体が、おかし（中略）人に説明するためには、遺伝子があたかも意思を持って利己的に振る舞うという説明をした方が、分かりやすい」とも述べている。ドーキンスが遺伝子を擬人化してセンセーショナルに表現したことに対して、遺伝子と細胞の複合システムとして捉えて反論している。

『話せばわかる！——養老孟司対談集 身体がものをいう』（平15、清流出版）の神谷敏郎との対談の中で、養老は進化に

ついで「眼のレンズ蛋白が爬虫類、鳥類、哺乳類ですべて違う。利用している酵素が違うからですが、それもはなはだいい加減で、使えるものを使った結果でしかない。先祖代々同じやり方できたものと、状況により変更してきたものが、混在している。だから形態の系統進化は難しい（中略）眼なんか統一的に理解できるものではないわけです。ドーキンスが眼も自然選択でできると言っていますが、それは一面しかとらえていません」と述べている。^{注9}

四

以上のように、養老の著作では、理系と文系を問わない幅広い教養と、物事への鋭い洞察力をもって、高度な内容を分かり易く記している。「遺伝子—細胞、脳—言葉という二つの、二元的に異なった情報系の存在を認め」（『人間科学』）、「細胞と脳とは『生きているシステム』であり、遺伝子と言葉は固定した情報」（同）と捉えている。

「多くの科学者は仮説を嫌うが、仮説を置かなければ、なにを調べていいか、その方向性がわからない。仮説が正しいか、そうでないかを検定するために、観察と実験がある。仮説を過度に嫌うと、なにも考えずに観察と実験をすることになる」（『人間科学』）と述べているように、養老は仮説についても積

極的に展開している。遺伝子系の情報と神経系の情報の二つの側面から人間について考察し、それらを踏まえて未来社会についても予見し、独自の見解を示している。

ところで、『唯脳論』の中で、「ヒトの活動を、脳と呼ばれる器官の法則性という観点から、全般的に眺めようとする立場を、唯脳論と呼ぼう」と記している。『唯脳論』に特別の意義が認められるとすれば、それはひとえに、タイトルが示すとおり、養老の思想全体をしるしづける〈脳〉の概念が、そこに明確に提示されているからである。「巨大化したヒトの脳は、徹底的に意識的な世界を生み出した。これを具体的には都市といい、一般的には文明といい、私は脳化社会という」（『人間科学』）ように独自の考えを提示している。現代人を取り巻く状況を捉える認識の出発点として、「主体」や「自我」ばかりか、「都市」や「身体」といった概念でさえその有効性が疑わしいものとなっているとき、「脳」に焦点を当てて捉えるのは有効であると言える。

個体を越えて社会を脳化することによって、脳は個体の死を克服して永続することができる。脳自体は個体と一緒に死ぬが、そのコピーが社会に残っていくわけである。それは利己的な遺伝子のイメージとも重なる。つまり脳は人の身体に乗って、自分のコピーを作り続けることで世代を越えて継続されていく。

養老は脳に焦点を当てて論じながら、脳化社会としての都市文明には批判的であり、身体や自然を重視している。都市化と

脳化という現象が、自然や身体の喪失をもたらす。それが現在われわれの生きつつある危機のあらましとして捉えている。脳化のもたらした技術文明が自然を破壊する側面を敏感に捉える養老の思想は、広い意味では、ポストモダン的なエコロジー思想の一翼を担うものだとも考えられよう。^{注10} なお、養老の好む二項対立を用いて言えば、都市と対比される自然でさえも、その中に「造られた自然」を含んでおり、決して単一のものではあるまい。

養老の説くように、現在の社会は都市化された脳化社会である。その結果人間は、人工的なものを求めるあまり、自然な側面が切り捨てられることにより、極度のアンバランスを来たすことになってしまった。このような分析は、他の思想家も指摘していることであるが、養老はそれを解剖学者の見地から、遺伝子と脳という二つの情報系に焦点を当てて分析している。極めて鋭い文明批評であり、とどまるところを知らぬ科学社会への予見と警鐘となっている。解剖学を学問的なものとしてのみ考えるのではなく、身近なものを捉える視点として文明批評を含めて展開した点は大いに評価されるべきであろう。

つまり、解剖学だけでなく、広く関連諸学、とりわけ脳や身体といった医学さらには分子生物学といった学問の成果を可能な限り咀嚼し、それらと人文科学や社会科学との複合の上で考察するという立場からまとめられており、このような視点から文明

批評のあり方を提示したものとして注目される。制度化された学問の閉ざされた体系を「知」の根源から問い返しており、多面的な思考のダイナミズムを示している。

「試験管ベビー、人工妊娠中絶、安楽死、脳死、遺伝子操作、臓器移植などについてさまざまな論争がある」（『脳の中の過程——解剖の眼』昭61、哲学書房）ような時代だからこそ、養老の発言には意義がある。例えば、脳死問題について『手入れ文化と日本』（平14、白日社）の中で、「脳が死ぬというのは神経系のことになってしまいます。しかし、ゲノムという情報系は動いています」と記している。そのことが、生きているのか死んでいるのかという判断を難しくしている理由だと述べている。それにしても、養老は当代の最新の科学の知見に拠りながら、自らの表現者としてのアイデンティティを確固たるものにしたし、現代への問いかけとしての意味も深いものにしたと言える。更に言えば、このような養老の評論や随筆などは、その科学が唱える知見を読者に教育し、人々の感性や思想を馴致する装置としても機能している。

注1 日経サイエンス編『養老孟司 アタマとココロの正体』の中の下條信輔との対談における養老の言葉。

注2 アンソニー・スミスは『生と死のゲノム、遺伝子の未来』（平11、原書房）の中で、「受精卵が商品価値をもち、改良可能な資源となりつつある

今、生命がどんなかたちで始まるかをめぐって、さまざまな点でこれまでの歴史をいとも簡単に塗りかえかねない岐路」と現在を捉えている。

注3 R・ハットン『遺伝子をあやつる——新しい生物技術』（昭55、講談社）

注4 遺伝子操作については、国の内外を問わず既に多くの賛否が出されている。例えば、中村祐輔・中村雅美『ゲノムが世界を支配する』（平13、講談社）では、「ヒトゲノム研究の進展が医療に大変革を来すであろうことや、ヒト以外も含めたゲノム研究に二一世紀のわが国の浮沈がかかっている」と肯定的に捉えており、メイワン・ホー『遺伝子を操作する——ばら色の約束が悪夢に変わるとき』（平12、三交社）では、「遺伝子導入は行き当たりばったりに行なわれ、その精度は高くないし、導入された遺伝子が生物をどのように変えるかは予測できず、導入遺伝子自体も不安定だ」と否定的に捉えている。

注5 『脳という劇場 唯脳論・対話篇』の大島清との対談の中では、「発生では、同じ遺伝子が働くにしても時期によって相手の状況が変わってしまうということがある。そこから辺がもう少し分かってこない……。非常に短く言えば、われわれが分類学でよく知っているような魚、両生類、鳥類、哺乳類という違いを、遺伝子の言葉で言ってくれということにどうしてもなる」と述べている。

注6 倉林靖は「文学における首から上と下——養老孟司『身体の文学史』（『文学界』平9・4）の中で、「巷では脳化が進み、生命さえDNAというプログラムが作り出した情報ということになるならば、生命の、そして人間の定義とはいったい何なのか問われようとしている。このような時代に、文学が外部の視点から問われねばならないという意味で、本書は来る未来に向けて書かれた、非常に重い内容をもった書物」と記している。

注7 『続・涼しい脳味噌』の中には、『死者の奢り』の「死体洗いのアルバイト」

ト」に関連して養老のところに問い合わせがあったとのことで、「大江氏といわば無関係の業界で、大江氏の影響をまともに受けたのは、私の周囲だけであろう」と記している。

注8 『人間科学』の中でも『利己的な遺伝子』の誤解に言及して、「遺伝子が存続してきたのは、それが遺伝子だったから特別だ、というわけではない」「すべての情報は、固定しているがゆえに、条件によっては『存続せざるをえない』のである」ということと、「進化の過程で存続してきたのは、じつは遺伝子のみではない。細胞という生きたシステムもまた、そうなのである。結局、実際に生き延びてきたのは、細胞——遺伝子という、『複合』システムだというしかない」ということを説いている。

注9 吉田直哉との対談『目から脳に抜ける話』（平6、筑摩書房）の中でも、養老はドーキンスの『ブラインド ウォッチメーカー』におけるコンピュータによる進化のシミュレーションが誤りだと指摘している。

注10 環境についての養老の思想は、『いちばん大事なこと——養老教授の環境論』に顕著に示されている。